

# 坂の沼琴

— 癌病養中詠草 —

廣瀬 誠



○この一卷は詠者自筆の歌稿をそのまま写真版にしたものである。

○題名『坂の沼琴』は黄泉つ比良坂を喘ぎ歩きつつ掻き鳴した琴の意。すなはち生死のはさまをさ迷ひつつ詠じた詩歌の意である。黄泉つ比良坂と沼琴の出典は『古事記』。沼琴は玉で飾りつけた琴である。『古事記』に登場するのは、正確には「天ノ沼琴」（又は「天ノ詔琴」）であるが、「天の」は憚りがあるので故意に避け、「賤の沼琴」「坂の沼琴」両書名を考へ、最終的に「坂の沼琴」とした。

（廣瀬誠、記）





## 廣瀬誠氏の癌病養生の

### 詠草集『坂の沼琴』の上梓に寄せて

社団法人 国民文化研究会 理事長

小 田 村 寅 二 郎

(亜細亜大学教授)

昨、昭和五十六年の一年間を通じて、癌と闘ひ抜かれた廣瀬誠さん（当時、富山県立図書館館長、満五十九歳）から、今年の春、夜久正雄さん（亜大教授）のもとに、「病養生中の詠草」として五百三十余首の和歌が送られてきた。

夜久さんはそれに目を通して大変な感動をうけられたものの如く、その詠草を私にも見せてくださった。私はそれを読ませていただいて、一体、大手術に前後する日々の体験と所感を、このやうに「切実に」「率直に」そして「いのちのほとばしりのままに」詠み上

げ、詠みつづけることが、果して出来ることなのであらうか、と感極まる思ひに打たれた。

その感銘はまことに強烈であつたので、このまま自分たちだけにとどめておいては申しわけない気になり、夜久さんも同じお気持ちでをられたので、廣瀬さんにこれの上梓のお許しを願ふことになった。早速その旨を富山の廣瀬さんにお伝へしたところ、

「御高書 かたじけな 忝く拝誦いたしました。拙い私の歌稿を刊行したいとお話、まことに身に余るお言葉と感激いたして居ります。……」

とのご返事とともに、上梓のご了承をいただくことが出来たのである。

この原稿は、廣瀬さんにしてみれば、なほ推敲を重ねたいと思はれる個所が多々おありになられることと思はれたし、また、筆跡にしても書き直しなさいたいお気持ちもあられることと思はれたが、御病後の日も浅いことであるし、過重の心身のご負担をおかけしては相済みぬ思ひがしたので、廣瀬さんにとつてはお心残りのままであらうとは存じ上げながら、あへて原稿（ペン字筆跡）のままを写真製版にとり、それをB6判の大きさに縮小させて上梓に到つた次第である。

表紙の題名とお名前は、ご本人に墨書をお願いし、写真縮少によって使はしていただいた。題名の『坂の沼琴』といふ言葉については、廣瀬さんご自身の「選題の言葉」が送られてきたので、それを「表扉の次」に掲載した。ぜひお目通しいただきたいと思ふ。（なほ、表紙の色合ひは、廣瀬さんのご希望で、「利休色―緑色系―」を選んだ。）

以上が、本書の上梓の経緯であるが、巻末に詠者ご自身の筆になる切々たる「療養回想」の「あとがき」をお載せしたので、この方を先にお読みくださるやう読者各位におすすめしたいと思ふ。その最後の次の一節は、私を更に深い感動にさそはずにはおかなかつた。

「私はなほ、生死のはざまの黄泉つ平坂のすぐ近くを歩みつづけてゆく。そして悲しみも喜びも、古典に託して誦みあげ、またみづからの拙き言葉にこめ全力をそそいで歌ひあげてゆく。歌は私の魂のひびきである。歌を詠み歌を作ることはわがいのちのあかしである。」と。さいごに、廣瀬さんの御健康を切に祈りつつ、以上、蕪辞のペンを擱かせていただくことにする。

（『国文研』銀座事務所にて）

昭和五十七年七月四日（日）



## 目 次

本書の上梓に寄せて……………	小田村寅二郎……………	5
癌病養中詠草　その一（富山市民病院入院中）……………	……………	1
同　　その二（千葉・放射線医学総合研究所病院入院中および退院後）……………	……………	17
同　　その三（再発・手術と決して）……………	……………	39
同　　その四（東京・癌研究会病院入院中——手術を受く——）……………	……………	53
同　　その五（退院・そして帰郷）……………	……………	83
あとがき……………	廣瀬　誠……………	109



癌病養中詠草

その一





秋の頃より

口腔内に異状を感じ、昭和五十六年二月二十四日  
富山市民病院耳鼻咽喉科の診察を受く。  
わが口中を見たる瞬間、医師の顔色さつと変れり。  
医師の態度、検査の綿密、すべてたゞことにあらす。  
われ容易ならざる病なるを知り、身辺を整理す。  
なすへきことありに多く、力及ばず。 二十五日

天地のまにまにわれはわが生を生きむと思ふ力のかぎり  
いきのかぎりわが静めをば果さむと心たぎりていそがしさかも  
かく思ひせくも計らひぞ 天地のまにまに静かに生きたく思ひゆ  
今は生きてな

二月二十六日終日吹雪。今冬最も寒烈なる  
暴風雪なりき。かくすさまじき吹雪見しこと  
なし。凍絶美の極なりき。

わがころ今は静けしうつそみのいのち終らむ時近みかも  
死にいたる病はすでにわれを冒しわがたましひを清らかにせり

吹きしおく雪あらあらし痛きかも恐ろしきかも清らかなるかも  
吹きしおく雪の恐ろしき美しさこの世の思ひ出とわがながめたり

亡き愛犬「熊若丸」を懐ひて

われ死なば三つの瀬川の渡り瀬に尾振り迎へに來たれわが犬

三月二日予期せしごとく癌の宣告を受く。  
翌日入院と決す。

全職員一室に集めわが病明らかにしつ寂と声なし  
引継ぎはすべて済ませぬ<sup>いそぎ</sup>眠乞ひ<sup>いそぎ</sup>済ませぬ今は天のまにまに<sup>あめ</sup>

その夜「富山史壇」の「編後私記」を書き終へて

ともし火のかすかゆらめく宵節句過ぎにし人の沈みて思ほゆ

## 宣告

三月三日

癌は死の宣告といへり  
われ癌の宣告を受けたり

癌は死の宣告といふ

しかれども

われ然が思はず

力のかぎり

癌と闘はむ

残されしいのちはいくはくぞ

わが生くべきいのちはいくはくぞ

すべては

天地のまにまに

すべては

天地のまにまに

## コバルト治療

三月四日

ほのくらき黄泉つ平坂うつつにもわが下りゆく深部治療室  
黄泉つ坂そのほの暗き寒き道階段踏み下りゆくかも  
九段ふみまた十一段踏みくだり穴倉のことし深部治療室  
許可なくして立入ることを禁ずとふ札ものし深部治療室  
治療室のおもたき扉看護婦の鍵をさぐりて開くその音  
内はほら外はすぶすぶと根の国へわれをいさなふあやしき力  
わが母はこの病院のこの治療受けつつ死にきその同じ機械  
指示したる医師やいづく寝台にひとり臥しつつ治療を待つも  
癌細胞打ちあしかむとたた頼むコバルト照射の魔の如き力

魔力もて魔力を制す癌細胞焼きつくす力はわれをも焼かむ  
寝台にまたうつぶればおもおもとコバルト照射の機械の動く音  
観念す治療ゆゆしも目をとちてコバルト照射の四分五十秒  
妣<sup>はは</sup>の国根の国底の国に臥<sup>ふ</sup>すわれに得<sup>え</sup>しめよ生<sup>いく</sup>大刀<sup>たち</sup>生<sup>いく</sup>弓矢

三月七日

足すくみ見舞ふも恐ろしく覚えしと涙ぐむかもかなしこの人  
恐しき病に怖<sup>おそ</sup>ぢぢわれ生きむ勿<sup>な</sup>泣きそわれは明るく生きむ

隣家の犬ミチヲ死せりとぎく

三月十一日

犬ミチヲ死せりといふかわかめでし犬のミチヲや死せりといふか

脱けし毛も生ふことのひて美しくなりしと羨ひしに死せるかあはれ  
老いさらば醜き姿やうやくに美しくなりて死せるかその大  
土深く掘りて埋めしそのむくろに土かけやりしと南くかかなしと  
残されし犬のハナコは鼻鳴らしさすらふらむか頻きて思ほゆ

三月十三日

勤め先へゆくバスが見ゆ動きゆくそのバス見ればわが心痛し  
勤め先いかにあるらむ呉羽山はつか見えつつ心苦しむ

生きがひは

三月十四日

生きがひはちさきこのいのちも日の本の大きいのちに生くと思ふとき  
生きがひはわが大君のすゝやかに八島国照らしていますと思ふとき

生きかゝは五十<sup>いすぢ</sup>銭の大宮<sup>ちぎ</sup>千木高く神さひ鎮りますと思ふとき  
生きかゝは代々木の大宮さされ踏み人々<sup>さば</sup>多に参ると思ふとき  
生きかゝは若き人々相つづきこの日の本を守ると思ふとき  
生きかゝは春<sup>はる</sup>夏<sup>なつ</sup>秋<sup>あき</sup>冬<sup>ふゆ</sup>美しく大和島根を浸すと思ふとき

〇 三月十六日

生き死には心にかけずしかれども仕事思へばただに悔しも  
生き死には思ふ煩はず仕残せる仕事思へば悔しきろかも

### 前館長佐賀宗久氏の見舞

闘病の体験ニましまわれに語り導きたまふぞうれしかりける  
賜ひたる歎異抄あはれよき人の息づかひ間近に聞ゆる如し  
たぐひなき書にもあるかも美しきこの強きしらへ歎異抄あはれ



## 果初汁 野菜汁の歌

果初・野菜の搾り立ての汁、病によしとて  
妻子、毎朝毎夕ニれを作り、病院へ走り  
届けに来

わが病直さむためと心くだき妻がしほりし果初の汁

野菜汁 果初の汁 なみなみと器にたたへぬその黄金いろ

妻と子が心のかぎりしほりくれし果初の汁 飲むがうれしさ

しほりたての汁こそ効けと病院へ走りもてこし汗のかがやき

○

しほりたての冷たき汁やかぐけしくわがけらわたに沁みてうれしも

この汁や貴の神汁 血管のさきのさきまで 清めてすずし

嘸むがごとく飲みくだす汁 妻と子のまじりの清り 五體に満ちぬ

妙藥（アロエ、さるのこし、かけ等々）

人々の厚きまじろ、次々にあまたの妙藥、吾にもたらすも  
藥草の効き目もあれど、思ふたまふそのま心ど、大電力なる  
妻の嘆き、天地動かし、こゝた人、吾を救はれと心砕きたまふ  
丸山ワクチン世話せむといふ人もあれど、必要なしと、医師うへなはず

弟より見舞状あり

われも弟も仔犬となりて、野路山路さまよへりとぞかなし、その夢  
人の世はいふせくもあるか、夢ならず、仔犬とならな初思はずあらな

植木・進野・椿沢の諸氏、病は累なれど同じ  
病院に入院中なり

君もわれも同じ病院に起き伏してあると云ふはかなしともあるか

快癒の見通しつきはじめて

夜久正雄氏へ事を報ず

三月二十三日

雪国の雪も消えたり東京は花かも咲かむまぼろしに見ゆ  
桜堤さくらの下を歩みます御姿偲ほゆすこやかにませ

同室の男

三月三十日

みとるべき妻なく子なく心さへみかみて病み臥す四十男あはれ  
妻のなき人あはれなりわれはよき妻<sup>め</sup>子<sup>こ</sup>持ちたりと思ふうれしさ

わがいのちかく安らげくあることも支ふる妻のあればこそ思ふ  
妻の存き人をあはれぬ妻をもつ幸を思へば涙落ちたり

俳句

妻に爪切らしむ病室の春日和  
氷枕ぬるみて寝返る夜半の音  
南吹くや汗ばむ脇の体温計  
島天心 残雪の市街まな下に  
吳羽山 暗うして残雪二点見ゆ

九分通り快癒、三月三十一日退院

「付載 夜久氏よりの歌信」 (三月三十一日付)

夜久正雄

何事のみたよりならむと封切りて読むにおそろしやまゐのみたより  
きみやむときゝてわれまたやめるかと思へて手足の力をえゆく  
をゝしくもユバルト照射受けましていえたりとききてやややすらぎぬ  
おそろしき病とは言へといえまたはたらく人の数あるものを  
うらやすくやしむたまへあまりにもつとめたまひしきみにしあれば  
いえまじしきみにふたたびおそろしきまかななかれとたゞいのらるゝ  
国のため道のためけたわれわれのためにもまたくいえませとこそ  
わか心きみこそしれとおもふにもまたくいえませとただにいのらる  
機とくらなして咲けど病む友をおもへばこころうれひにしづむ



癌病養中詠草

その二





昭和五十六年四月十三日 千華市放射線医学総合

研究所病院に入院 サイクロトン照射治療を受く

千華の野は海近くして吹きつくるつめたき風にさくら散りつつ

# 夢

ふしぎなる夢を<sup>い</sup>見たるいつくとも知らず賑はしき坂登りゆきし  
坂の道下りとなりて人まばら<sup>い</sup>そのさみしきをわれは下りし

うしろより帰れと呼はふ声きこゆ南きつつわれはなほも下りし  
帰れ帰れと呼ぶ<sup>い</sup>声に足とめて泣きつつ走りくる妻を見つ  
歸水帰れと泣き呼ぶ妻の喜<sup>い</sup>ひて追付くと見しとき夢のさめたる

よみの坂下りゆくわれを力かぎりといめし妻を夢に見しかも  
うつよみのいのちの境に相思ふいかなしき夢を見しかも

### 望郷

ふるさとの<sup>くれは</sup>吳羽のさくら山もせに散りつつあらむその川の瀬にも  
<sup>かづさの</sup>上総野の北にたなひく青雲のはろけさふるさと思ほゆるかも

### 妻帰りゆく

付保の妻、東京沼袋に宿りて千葉の病院へ  
日参せしか一旦帰郷す 四月十八日

病院の玄園にたち見送れば妻の夕影いや遠ざかる

夕ざくら散りしく木蔭ふりかへる<sup>わきも</sup>我妹の面輪ほの白く見ゆ

付添の妻は帰りて病室にひとり戻れり灯の暗き室

俳句

病室の眼下のさくらも散りそめぬ  
ひとひらの落花見送りつ病室に  
春雷一過 夕日赤々と病棟に  
水溜り光るや花の暮るる下

ジュースつくり

ジュースと音をたてつつジュースはいま動きたり溜りくる汁  
人参もレタスもリンゴも粉々にとひつつ器に溜りくる汁  
われとわが手にてつくれるこの果汁コッパかたづけられしと飲みつ

## 洗濯事始め

洗濯機にシヤツ・ステコを投げ入れてスイッチ押せば渦まきかへすも  
しぼり機に洗濯物を移し入れてスイッチ押す、手順確かめながら  
教へられおそろおそろも洗濯機生れてはじめて手づから使ひつ  
たやすしと人はいへどもはじめての手つきおちおち笑はれてしつ  
事なくて一人しあれば洗濯もジューズつくりもかくて成し遂げつ  
干し物台に干し物つるし晴ればれと見あぐる青空鳥渡る見ゆ

## 暁の洗濯

修め得し洗濯のわざうれしみとまたも洗濯機を使ひてみたり  
暁の皆寝しつまる洗濯室スイッチ押せば音のよきかな

かかる時由洗濯すなど看護婦のきびしき声にわれうろたへつ  
洗濯は半ばながらにすすすすと引き返したりきびしき掟

### 病養生活

いとはしき病にはあれどくよくよせず病養ふをたのしみとせむ  
心構へ心の持ち方おのづから初憂きこともたのしくなりぬ  
病養ふあるまあるまに書<sup>ふみ</sup>も読み意義深き時期となむと思ふ  
病養ふ折々のミニウ歌によみ句にも作ればたのしみ果なし

見舞客(弟妹、義兄、義姉、義妹、甥姪らつきつきに見ゆ)

つきつきに見舞の人々と訪れていたはりたまふ心のうれしさ  
ジュースつくるその材料としタス、レモン<sup>さほ</sup>にもたらせりわか枕べに

かふらぐき若布の酢物ふるさとの海山の幸つゝゐて賑はし  
ふるさとの山のすす竹三つ葉芹、季節の薫り満つるくさぐさ  
賜りし果物煮物薔薇さくらわか枕へは置き所なし  
洗濯物出せとはのうせわれすゑに手づからすましぬ感謝して辞す  
ありあまる人のまごころ花と匂ひいたつきに沈むわれを生かすも  
見舞ひと帰りしあとの病室の窓にしふきて繁き雨音

### 遠山

四月二十日

山見えぬとあきらめゐしに建物と建物のはざま遠き山見ゆ  
日の落つる街空のかたは淡くちやくかそけきその山ゐたと眺めつ

日の落つるみ空赤きにかすかなるその山影は暗みゆくかも

### 遠富士

山見えぬとあきらめぬしに富士が見ゆ建物と建物の間の遠富士  
夕づく日雲隠るなへ西空に淡きかもちさきかも影なす遠富士

### にせ富士

富士と見しは富士に非ざりきこころからは富士は見えずときげはくやしも  
建物と建物のほさす富士と見しは何山なるぞかのにせ富士は

富士（けさは富士がまばしく見ゆるぞと南かされて屋上にのぼる）四月廿一日

朝日照りかかやく富士を一目見ぬと思せき登る屋上階段

大<sup>い</sup>き建<sup>た</sup>物<sup>ぶつ</sup>た<sup>ち</sup>は<sup>い</sup>だ<sup>い</sup>か<sup>い</sup>ば<sup>い</sup>富<sup>ふ</sup>士<sup>し</sup>見<sup>み</sup>え<sup>い</sup>と<sup>を</sup>ど<sup>り</sup>し<sup>い</sup>心<sup>こ</sup>も<sup>な</sup>し<sup>く</sup>な<sup>り</sup>ぬ  
青<sup>あお</sup>空<sup>そら</sup>に<sup>い</sup>輝<sup>ひ</sup>き<sup>そ</sup>ば<sup>だ</sup>つ<sup>い</sup>白<sup>しろ</sup>聖<sup>せい</sup>の<sup>い</sup>堂<sup>どう</sup>う<sup>ら</sup>め<sup>し</sup>き<sup>か</sup>も<sup>い</sup>富<sup>ふ</sup>士<sup>し</sup>を<sup>い</sup>隠<sup>かく</sup>せ<sup>は</sup>

青空

青<sup>あお</sup>空<sup>そら</sup>は<sup>い</sup>澄<sup>すみ</sup>み<sup>て</sup>美<sup>う</sup>し<sup>い</sup>見<sup>み</sup>る<sup>す</sup>ま<sup>に</sup>そ<sup>の</sup>濃<sup>の</sup>き<sup>い</sup>色<sup>いろ</sup>に<sup>たま</sup>魂<sup>たま</sup>吸<sup>ひ</sup>け<sup>れ</sup>ゆ<sup>く</sup>

病室のなかめ

病<sup>い</sup>室<sup>しつ</sup>の<sup>い</sup>念<sup>ねん</sup>より<sup>い</sup>見<sup>み</sup>お<sup>ろ</sup>す<sup>い</sup>一<sup>い</sup>む<sup>ろ</sup>の<sup>い</sup>茂<sup>さ</sup>り<sup>は</sup>い<sup>つ</sup>も<sup>い</sup>揺<sup>ゆ</sup>ら<sup>ぎ</sup>て<sup>い</sup>あ<sup>る</sup>か<sup>も</sup>  
風<sup>かぜ</sup>な<sup>し</sup>と<sup>い</sup>思<sup>おも</sup>へ<sup>る</sup>と<sup>き</sup>も<sup>い</sup>揺<sup>ゆ</sup>ら<sup>お</sup>む<sup>る</sup>梢<sup>しやう</sup>を<sup>い</sup>ま<sup>下</sup>に<sup>い</sup>見<sup>み</sup>つ<sup>つ</sup>暮<sup>く</sup>ら<sup>す</sup>も<sup>い</sup>  
木<sup>き</sup>に<sup>も</sup>神<sup>かみ</sup>花<sup>はな</sup>に<sup>も</sup>神<sup>かみ</sup>あ<sup>り</sup>神<sup>かみ</sup>と<sup>い</sup>神<sup>かみ</sup>こ<sup>な</sup>づ<sup>き</sup>揺<sup>ゆ</sup>ら<sup>ぎ</sup>日<sup>ひ</sup>は<sup>い</sup>永<sup>なが</sup>き<sup>か</sup>も<sup>い</sup>



はい  
散歩にいひて（ただし病院構内のみ許可）

病院をいひてわか仰ぐ木々の若芽並きたさまに美しかりき  
青空に透けてかがよふ榊の芽の黄金なす色見れどあかぬ  
青空に遠けてかがよふ並木道の榊の芽立ちの黄金なす色  
く水なるの八重桜花青空に揺るるを仰ぐその濃き花を

散歩

放射性物質を持つコンクリの大き建物春の日に映ゆ  
立入禁止のいかめしき柵内小鳥らは春日を浴びて初っぱみぬ

# 桜

ハ重桜五分咲きは良し咲き満ては造花の如しわれは好まず  
清く咲き清く散りゆく山桜のそのいさぎよきに似るものぞなき  
この春は病にこもり山桜咲き散る美しさも見ずて過ぎにき  
常の春は仕事を多み山桜心しつかに見しこともなし  
桜花心ゆくまでながめたしこのわが願ひいつか叶はむ

## 夢

砂浜に臥し居し遠呂智<sup>をろち</sup>かはと起ちわれに向ひくる恐ろしき夢  
たちまちに遠呂知<sup>をろち</sup>は人に変りつつ大太刀振るのわれにいとみ来

涙の打つ者 砂浜はせちかひ 遠る智とわれと汗かき 歎ふ  
裕一ひろかずもわれと力をあはせつつ 木太刀こだちふるへど 遠る智は強し  
わが力今し尽くとき おそろしき 夢さめ 病室の夜は深しも

### 研究所の大

何事のおこりたるぞや 研究所の一角けたたまし 諸大もろいぬの声  
人の病いやすかためと思へども かなしいたまし 戾かれゆく大

### 妻来る

四月二十六日

けやき若葉蔭ふむ道をとぞろありき 妻やくるやと心おちあす  
春の光みなぎる 並木道なみちかろやかに 荷物ものをさけて 妻来たる見ゆ

あたかき日ざし浴びつつ芝園に二人久々に語るうれしさ  
八重桜咲きかがよひて揺る蔭に語り笑へばたのしくもあるか  
失敗談のかずかず語り手まねして笑ふ足もこのたんぽぽの花

妻帰リゆく

退院の時近づくと妻は荷を運び帰りゆく日もかたふくに  
車つきの荷をおし帰る妻の姿桜の蔭を曲りゆく見ゆ  
あすもまた逢はむと思へどなほしをしく八重桜の下に立ちつきたり

○  
咲き満てる八重ざくら花風吹けば散りみだれゆくたんぽぽの野に  
八重桜の花ひら浴びつつ日ざし強く深みゆく春をひとり惜しみな

犬

病院構内隣接の住宅に犬の<sup>折々</sup>声す、散歩の折  
その犬を一目見むこと果さず、

ついに犬見ずして戻る散歩みち散りかかりくる八重やぐら花

### 同室の人退院す

二週向共にあし人退院す門に見送り涙ぐましも  
若葉せし病院のみち車より手振りゆく人すこやかにませ

### 同室患者に犬の話を書つて

あるい寝る時間を知りて寝よと鳴く犬の話をはれほれときく  
わけを話し留守せよといへばうなだれてるす守るとふその犬あはれ

あるいの心あるいの言葉をよく知りてふるまふしわざきくに可愛ゆし  
大といふ賢く可愛ゆき氣ゆゑたのしくもあるかこの人の世は

おくり物をいだき

何よりのよき贈り物病床のわれにもたらす春の歳時記  
春の花いろとりどりに咲き満ちて目をたのします写真歳時記  
贈り物残して君が去りしあと日は永きかも病室の日は  
病室の窓の下広く若葉満ち鯉幟すてにゐるかへる見ゆ  
けふる如き緑のあふみの鯉幟矢車きらめき日は永きかも

夜久正雄氏へかへし

賜りし御歌の手紙ふところにこよなき病の守りとしせし

四月二十八日退院して沼袋の蜷川家におちつく  
四月二十九日天長節、テレビにて宮中参賀の状況拝観

旗振りて祝ふ民らに大君はためしなきみ言葉たに賜ふぬ  
畏<sup>おほこの</sup>けれとややたとたどしく心こめ宣<sup>の</sup>らす御<sup>み</sup>声に疾こぼるも  
大殿の広場もこころに万歳の声とよもせりみ民わかれが声

## 雨の庭

四月三十日

放射線後遺症のため、退院後かへつて不調、  
沼袋邸に日ねもす床を敷きて病臥、臥しな  
から庭を眺む、正岡子規もかくの如くありけむ、

もち若葉かなめの若葉空に満ち明るき庭に降りそぐ雨  
垣もとの一人静ひとしづか二人静ふたりしづか礎草いかりさう之しらの茂みのうちそぐ雨  
花蘇枋はなすはう木かけに揺らぎ木蓮は空に揺れつつ降りしぐ雨  
鳴子なるこゆりおたまたき草さうも若楓かえでもえたつ下陰かげにうちそよぎつつ  
病々床に臥しながら見る庭さきの雨にそぐ花雨に揺るる葉  
むらさきの大きな木蓮の花びらに雨のふとふ玉かとも見えゆ  
木蓮の広葉に繁いじつく雨の粒葉裏より透けて柔かに見ゆ  
久方の天あめの明あかる玉と雨の粒若葉の葉裏より透けて見えつつ  
まては権いんの若葉のさきの雨の粒の大きな光りきらめきて落つ  
いささかの小庭といへど心つくし植ゑたるくさぐさ雨に深しも  
いささかの雨水溜り緑映し雨のしづくに折々乱る



## 雨後

雨はれて日さし斜めにもち若葉もかきめ若葉も火と燃え立ちぬ  
まては榎の若葉あざやかに入日さし雨あかりゆく幸を歌へり

(草樹の名は義姉より教へらる)

沼袋邸にて茶の湯をもてなさる 義姉の点前なり

俄かなる茶の湯のつとひ着るものも改めぬままおつおつ坐りぬ  
もてなしの茶の湯うれしもわかみなり 恥らふつつも居まきの正しぬ  
清めたる畳目すかし四疊半の夜をしづかに釜 煮ゆる音  
久にしてつらなる茶席うやうやしく君のみどりかたづけ飲みつ  
つくばゐの灯火きよし庭の茂み木草も石も青々と見ゆ

五月一日帰郷

千華の野に病着る立山の見ゆるふるさとに生きてゐる帰し  
立山の聳ゆるふるさとあなうれしいのち生きてゐるわが帰し

放射線後遺症にて味覚なし「味痴」と自嘲す

口に残る「味痴」のかたしみ黙々とすしつづするぬるき味噌汁  
熱きもの口に入れえず味噌汁も煮初もさましておつおつ食ぶる  
甘きもの甘くはあらずいつの日かよみがへるべき舌の味覚は

義兄 蟠川達郎氏夫妻へ

深くあつき君かみころに支へられ病さやかに癒えしうれしさ

心砕き力尽してわがためにはからみたまひしをうれしと思ふ  
くに難れ遠き境に病みしときかかふりし情とはに忘れい

### 銘菓を送られて

病みあとの口にほのぼの漂ひところけるごとし銘菓淡雪

### 全快祝

深きあつき人のみなさけ伊<sup>い</sup>照<sup>て</sup>りそそぎ難<sup>かた</sup>き病を治かしたまひぬ  
常<sup>とこ</sup>若<sup>わか</sup>のみとりみなぎる大地<sup>おほつち</sup>にわれ生きてあり天<sup>あめ</sup>のまにまに  
わがいのちあらむかきりは尚しわが行くべき道を行かむと思ふ

『付載 夜久氏よりの歌信』 (五月三十一日付)

夜久正雄

よろこびのおもひニサあげかちときのにああげむとす友やまひいゆ  
友の多の令厚き封書何たらむ病いかにと胸ときめきし  
をりきりに祈るのみなりしわれをしもなぐさむごとし友のたよりは  
ぬむころにやしちひたまへ君はしもわれら友らのひかりなるものを

癌病養生中詠草

その三



七月二十九日、千葉放医研病院の月例検診にて  
再発を宣告され驚く。紹介されて急遽東京の  
癌研病院に赴く。手術と決す。全治せしと思ひ居  
しに、大なるショックなりき。

再発の宣告かなし妻と並<sup>び</sup>息つめて聴くその宣告を

照射治療す<sup>べ</sup>に限界、手術する外はあらじときくかなしさ

わが肩にもろ手をかけて力落すなど声高く医師は勵ましたまふ

癌研への電話連絡す<sup>べ</sup>に済みぬ紹介状待つ心うつろに

慰めたまふ

再発の緊急事態、人訪は必ず定とりやめ癌研へいそぐ  
走りゆく電車に妻と並び居て魚の如くに物言はずあり  
癌研へ急ぐ電車の右左街走り過ぐすべて飛びゆけ

すべて飛び去れ

癌研のその自動ドアわが前に静かに南く今はすべなし

手術せば発声も食事も不自由になるべしといふ恐しき手術  
手術せすば腫瘍拡がらむ処置無けむと強く静かに医師は諭し  
たまふ

後戻り今は許されず最高の医術ミニにありとただ思ふべし

天地のまにまに今は生死をかけたる手術受けむと思ふ  
弟妹に電話掛けしむ再発の悲報はうからうかに聞くらむ



東京沼袋の蜷川邸に力なく帰り着く

迎へます姉の顔暗しいたはりて湯をすすめませどその声暗し  
昼風呂に体沈めぬ生き死にをかけたる手術心を去らす  
湯に浸りほう然とあり居間のあたり妻の泣く声かすかに聞ゆ  
くつれ伏し咽ひ泣くらむ妻の声かすか聞きつつ涙あふれたり

帰郷して

わが家の戸力なく引く裕ひろ一かずにこの悲しみをいかにか告げむ  
くさぐさの仕事積れる勤め先すへなき思ひに捌きに捌く

再発す手術受けむと告げたれば、かき曇りゆく君の面はも

夏夜に沈む人の面はも

書類とも皆引き破りつ生きて又この抽出を開くことありや  
後事皆君に託しぬた一人、ほう然として館長室に立つ  
図書館はいかになるかとさまさまに思ひ乱れて涙落ちむとす  
うち沈み名残惜しみて門に立ち見送る君に別れが行かむ

米澤康氏、稗田董平氏らつきつきに見ゆ

おもむろに口を開きて再発を、手術を告ぐれば、ただ驚く君  
わがからだを君氣遣ひて降りいそぐ君帰りますか草深き山に  
何事か言ひ残せる如しいつまでも面影に見ゆ君の姿は  
賜りし利賀山あゝの山菜のくさぐさ重き思ひに沈む

手術準備のため奥歯三本抜く、癌研の指示なり。

歯医者にて良き歯抜かせつあなかなし口の手術に備へむかため  
奥歯抜く機械のひびき口ひびき恐ろしき手術をふと思はしむ

八月二日富山市戦災記念の日なり

額<sup>ぬか</sup>に立つ汗のひびつた戦ひに敗れしその日思ひかへしぬ  
烈しき日焼跡<sup>やけ</sup>に照り靴底も焦げつくまでに熱かりしかも  
生き残りかく長らへしわかいのちあらむ限りは国に尽さむ

なき祖母を憶ふ

戦災に失せしかの祖母<sup>おばあ</sup>やわが病知らばいかばかり歎きおはさむ  
わがために心碎きて何ものも顧みざりしわが祖母あはれ

街頭、高瀬重雄氏による再発を告ぐ 八月四日

人さばに行きかふ町かどわが手握り涙<sup>なみだ</sup>落したまふこの老学者  
何といふかなしきこととわが手握り放したまはずこの老学者

電話

八月六日

入院日手術日知らすと癌<sup>がん</sup>研り電話かかれり覚悟の電話

八月七日夜、富山技術短大公開講座、県民会館  
大ホールにて「山と人生」につき講義す、手術後は、  
よし生きてありとも、かかる講演は不可能になるべし、  
これを最後の講演ならむ

今生の或は最後か聴衆を静かに見渡し、壇に立ちぬ  
今生の最後かと思ふわが講義ひたに説きゆく唾のみみせて  
妻も子も妻の母も聴衆にまじり居てわが声聴かむと身じみぎ  
もせず  
日本の山拝む心を自然保護の原点なると力みめて説く  
記紀万葉に事始め今上の大御歌に話結ひぬ万感をこめて

八月八日 館を辞す

掲けたる大御姿に深々と頭<sup>かぶ</sup>を垂れてなごり惜しみぬ

館長室今しいでゆく生きてこの戸を開く日はいつにかあるへぎ

戸を開く日をいつか思はむ

尾振る犬すこやかにあれ帰る道いつも撫でやりしこの犬よさらば

富山市民病院吉川院長、癌研引継のため  
データ準備さる

こまこまとデータ整へわがために計らひたまふぞうれしかりける

八月九日 入院前日なり

墓参

妻子らと祖<sup>おや</sup>のみ墓を掃き清め花ささげつつ涙ぐましも  
蠟燭<sup>ろうそく</sup>にともしたる火のいくたひも風に消えつつ物思はしむ  
経を誦む声くぐもりて墓山の茂みに深く流れゆくかも  
祖<sup>おや</sup>たちのみ顔つぎつき香煙のゆうぐまにまに現れて消ゆ

墓参の帰途立山の玲瓏たるを望む

墓山をまかりいづれば夏青き立山が見ゆいつか又見む  
しばらくは相見ぬ山と心深くふるさとの山に名残惜しみぬ

塵土のやしろに詣つ

みあらかの母のしいまや氏神は氏子いとほしと見そなはずへし  
うぶすなの社のみまへ手を拍ちて眠を乞ひつ添ひて見護りたまへ

夜行列車にて上京す

加藤清之氏夫妻駅へかけつけて見送らる

ふるさとを發ちゆく夜汽車馳せつけて見送りたまふ義兄義姉たち  
發車ベル今し鳴るとき握りしめし君が手力をわれは忘れし  
生死を知らぬ手術に出て發つとなりの限り思ひますか君



新しき教壇に立ち病無く平らけく安らけく勤めませ君（義兄へ）  
ヨーロッパに君<sup>い</sup>住ます頃生き死にも知らぬ手術にわれ沈むべし（義姉へ）  
生きてまた見むこと難しと思ふまに列車動きてたちまち早し



癌病養中詠草

その四



昭和五十六年八月十日 東京癌研病院入院

ふるさとの清き山川恋みつそ濁れる都の空の下にある

薬師岳登山中の裕一を憶ふ、東京は曇天、  
今にも雨荒れぬべきけしきなり、

薬師嶺<sup>ね</sup>に雲なかりそ裕一<sup>ひろかず</sup>が攀<sup>は</sup>ちつつあらむ雨な降りそね  
東京に雨は降るとも薬師にはな降りそ裕一が攀<sup>は</sup>ちつつあらむ

付添の妻、沼袋の家に起居し、病院に日参して  
われを看護す

俄かにも白髪ふえたる妻の髪ベツトの上り見つつかなしむ  
わが妻やいかにあるらむわがために心碎く妻につつかあらすな

○

帰りゆく妻見送ると門かどに立てば涼しき夕風三人を吹くも  
帰りゆく妻見送りて門に立てば夕雲ちうかり月走る見ゆ

八月十五日

病ある身はすへもなく病み床に戦没者追悼のラジオをきくも  
姿正し膝折り曲げて病み床にわが大君の御み声をぞ聞く

○

家族らに病あらざれわれ一人病引受けてあらむと思ふ  
おそろしき病にしつみ家族らのいたつき思へばたすら悲し  
家族らも親族たちも健やかにあれよと祈る他は願はず

○

ふと思ふ利智<sup>とが</sup>の山ある蟬の声満ちて涼しからむみ寺のめぐりに

手術の日近づく 八月十八日

人々のあつきみ情がかかりてわれは大きな手術に臨む

大きな手術に立ち向はむとす

妻子らの深き祈りにまもられて手術に臨む何も恐れい

記紀万葉麻須美のしらへ生きいきとわれを生かせり何か恐れむ  
うぶすなの社遙かに伏し拝みほほゑみてわれは手術に向はむ

ふるさとの清き山川思ひつつ手術の痲酔にわれとけ入らむ

君が代を千代に八千代にと祈りつつ手術の痲酔にわれとけ入らむ  
祖<sup>おや</sup>たちも亡き大もみなこぞり立ちわが命の瀬戸見<sup>み</sup>つめ<sup>め</sup>あらむ  
良き医師<sup>いし</sup>にすべて任せて生きも死にも神のまにまにわれは眠らむ



大手術を前にして

わがいのちあらむかぎりは君と国思ふ心に生きぬと思ふ  
われ死ぬも廣瀬の家はとはにつつきすめらみくに尽せと思ふ  
飛騨住みのその昔より君のため尽してぞし廣瀬の家は  
何よりも家が大事とわが祖父は幼きわれを諭したまひき  
君のため命死ぬとも惜しましとしみじみ祖父は語りたまひき  
家持の心さながら貫きし祖父の生き方みても思ほゆ  
裕一のよき妻迎へわが家の続かむことをたすらに念す

○

わが病きもりたまひし人々のなさけ思へば涙にほるも

沼袋の家なかりせばと思ふにもかりそめならず世のつなかりは

手術前日

八月十九日

大きな手術あすにひかへて香りよき茶のしたたりを妻のためしむ  
弟を門かどに送りて手を振れば夕風すずし幸さきくて又見え

手術をばあすにひかへて湯に浸る湯にし浸れば物思ひもなし  
あすの手術思ひて窓辺にわが立てばしきりと聞きく町蟬の声  
夕蟬の声かしましく病棟の窓にひびきて夏暮れむとす

○

病院のまつき食事を補ふと妻が作りし味噌汁の味  
おふくろの味を伝ふる妻の味病院のベッドにすするうれしさ  
妻の上につつかなかれと帰りゆく妻の夜道をひたに案あんじつ

## 手術の前夜

手術をばあすにひかへて読む古事記の清きしらべにわが浸りつつ  
死にかへり生きかへりつつ大穴年おほなま遠神のみことは苦しきまじき  
太平記万葉集もとりにいでて読みふけりゆく手術の前夜を  
川出麻須美の清きしらべにとけいりつつ手術の前夜を安らかに寝む

## 手術日のあさ

八月二十日

夜もすから風吹き入りてフラインドはためく音は降る雨に似たり  
フラインドの華すれの音の夜もすから枕にひびき安寝やすみせりけり  
ふるさとの里部の谷の激つ音 遙けきものとなりにけるかも

手術日の朝を迎へて病み床にかしき大御歌おしそかに読む  
めざめたる病室の壁に黄なる蛾の貼りつきしこと動くともせず  
めざめたる病室の壁に動かざる黄なる蛾なれも安らけくあれ  
病み床の朝床に誦むふることの調へずかしく心しまるも  
大き力いま身に満ちてひたすらに古事記のことは誦みつつけゆく  
ふることの調へ妙なり誦みまきに心はあめつちにとけて安けし  
大き手術待つ時のまをふることのしらべに浸りだにうれしも  
天若日子が高胸坂を射つらぬきふるひ立ちけむその矢目に見ゆ

手術時刻切迫す

劍立山天<sup>あま</sup>ぞそり立つ清き姿思ひうかべてわれゆかむとす  
呼<sup>ひ</sup>ひ出しの声待つといふ松陰のいまはの歌を身に迫りくる  
呼<sup>ひ</sup>ひ出す声今やおそしと涕きにわく歌つぎつきにいそぎ書きとむ

かくて八時半妻と妹に送られて手術室に  
入り、手術終りしは夕五時なり、妻と  
妹泊リニみて看護す、

## 手術のあと

いたはりの妻の言葉を夢うつつ麻酔さめゆくベッドに南けり

八時間の手術のあとの意識もとりなほうつろにぞ物の音を聞く

妻妹弟義兄ら顔寄せて長き手術を憂ひ居しといふ

輸血点滴、管の数々まとひつき蜘蛛の巣なす中に寝かされてあり

尿の管、食初<sup>くた</sup>の管、管の向にかすか息つくわかいのちかも

動きなばいのち切れむと夜もすから苦しきに耐へわれは動かず

昏々と眠りては又強く目ざめ眠らえぬ病室の夜はも更けゆく

せはしなく痰つまりくれば痰取り機おそろおそろも妻は手にせり

事しあらば火にも水にも入りなむと妻は夜すからわれを看とれり

わが背子は初を思ほしと万葉の歌唱<sup>とな</sup>へつつ妻は祈るも

妻が山姥校六年のとき先生に教へられし万葉集の歌は「わが背子は初を思ほし事しあらば火にも水にもわれ無けなく」の一首にして、この歌事あるに口をついて出て、常に忘れずといふ。恩師の名は千葉徳二先生といふ由。

### 八月二十四日未明原因不明の出血

噴き出づる血潮のさ霧、血の匂ひ、馳せくる看護婦、夜のほろにも血の塊のどを塞<sup>ふた</sup>ぎて息苦し噴き出づる血にむせかへりあり  
当直の医師かけつけて止血止血と声あわただし死を覚悟しつ

指<sup>おさ</sup>もてかつかつ毒の手のひらに裕一ヨロシクと書きて力尽く  
わが指談正確に妻は復唱す噴き出づる血にわれいま死なむ  
たちち々に震ふつくばかり寒くして天地<sup>てんち</sup>に体の置き所なし  
熱くなり寒くなりつつかたかたと震ふとまらずかくて死なむか  
輸血の針腕<sup>かた</sup>を刺しぬ夢うつつ夜の引明けを眠りなむとす

八月二十五日

看護婦かゝるかに寝息うかがひて去りゆくらしき灯<sup>あかり</sup>の動く見ゆ  
病院の長き廊下を人のゆくかそけき音の夜深きしいま

八月二十六日



筒先を尿管の口に入れそゝぬたちまち温しあはれ猿股  
汚れたる猿股寝巻取り替ふと妻も妹も汗しとなる

八月二十八日

病室の窓より屋上の草を認む

ひこむらの小草そよげり久に見る生ける小草は雨にそよげり  
ひこむらの小草そよげる久に見る生ける小草や雨にそよげる  
稲光るたちまち蟬音とどろき夏送り出すいかつちの神  
夜深く蟬高鳴きてけたたまし去りゆく夏を呼び返すとかも

八月二十八日は大伴家持卿の命日なり、旧曆新曆の  
相違はあれど、卿を偲ぶ情切なり。

家持やかもちかいまはのきはに目にしけむ秋みちのくの野山思ほゆ

かが子<sup>こ</sup>裕一<sup>よいち</sup>来たる

八月三十一日

たづねにしわが子を見ればひとときに涙あふれてせむすべもなし  
生きてわれ裕一を見る命の瀬戸越えてうつつに裕一をぞ見る  
死ぬ瀬戸を越えたるわれを裕一の手を握りしむ涙におせひて  
死ぬ瀬戸を越えて今かく裕一の手を握りしむ生きてうつつに  
口きけず初も言ひえずもどかしき筆談かなし病み人われは  
もどかしといへどうつつに裕一の話きくうれしさのやりとをろなし  
死ぬとわれ思ひし瀬戸をからく越えかく生きてある幸<sup>さい</sup>かぎりなし

カミユレ抜き、発声可能となる

医師にわが喉もと処置されわが息や声となりゆく夢にはあらず

拙けれどわが声出たりと妻と子と長ふ見つつうつつともなし  
声出つと妻子長ひぬ同室の患者も付添もみな長ひぬ

## ゴム管食

手術翌日よりゴム管による流動食。九月  
一日よりは濃縮流動食となり、操作困難を加ふ

鼻より胃へ管をさしニミ流動食送りニみつついのちつなぐも  
力入れがラス器押せば流動食管つたはりて胃袋に落つ  
汗しぼり妻はがラス器押しに押し流動食をわが胃に送る  
流動食管につまりて動かざれば湯茶をそそぎてゐた押しに押す

ガラス箸とゴム管<sup>かん</sup>のつぎ目は、つれ易く横さにとひちる流動食あはれ  
牛の<sup>し</sup>と鼻緒垂れたる、我ながら可笑しく悲しなほ強く生きむ  
牛の<sup>し</sup>と鼻緒垂れつつわが居れば可笑しく悲しく強くありけり

ゴム管をは、つし径口食事となる 九月八日

管は、つし食事を取れどやすやすと食らひ得るものわれにはあらず  
豆腐ならは通るわが喉、焼豆腐たやすくは通らずあはれわが喉  
一かけの焼豆腐をも吞みかねて苦しき食らふわれをあはれむ  
焼豆腐と豆腐のちがひかくまてにありとは誰か思ひ知るべき

なき師友を憶ふ

九月九日

清く強くいのちのかぎり燃えつきし亡き師亡き友沁ずと思ほゆ  
成しぬべき仕事いだきつつ息絶えしいまはの思ひ偲ぶにたへずも  
自心絶えぬいまはの思ひあなかなしむたむた迫り眠りえず我は

九月九日

うれしくもかすかに南や厠にこふと南きとめしこほろぎの声  
南かざりしこほろぎの声かすかにも厠に立ちて南きしうれしさ  
ふるさとは虫の声々繁からむ都は虫の鳴く音かほそし

九月十一日

帰りゆく子を見送りて門に立てば夜のややかにこほろぎの声

九月十四日

病み床にいねつつぞ南く秋の夜の祭はつし離子の遠きざわめき

ふるさとより吳羽梨を送られたり、されどわれ食  
えず、こまかく刻み、小指の爪ほどの小片一かけら  
辛うじて吞みこむを得たり 九月二十一日

なつかしきふるさと吳羽くわはの清き梨その重き包をおしいたたきぬ  
解くまゝにひたひた漏りくる清き香やふるさと吳羽の梨のうめしさ  
食へぬば刻みに刻みし梨の实のその一かけらは玉石の如し  
小刻みに刻みし梨の一切れの清き香したたりわが喉に落つ  
音立ててさくさく梨の实を噛みし昔思へば涙し落つも

休憩室のテレビニュースにて 天皇陛下を拝す、

入院後、手術後はじめて拝せし御姿なり、九月二十五日

ゆくりなくテレビに仰ぐ大君の御声<sup>みこ</sup>御姿<sup>みさ</sup>に決し落つも

十月一日

台風の雨うちしぶき暗き日をわがふるさとはいかにあるらむ

十月三日

この病いまは癒<sup>な</sup>ゆとも癒にしあればいつまでかわが生きてあるべき  
わがいのちあらむ限りは日の本の道一筋に行かむと念す

○

蝶かとも見つつしあれば青空を吹かれ舞ひゆく黄葉<sup>もみぢ</sup>とみら



高橋主任看護婦と登山談

山の話きけはたのしもこのからだ登りうべきかと思へばかなしも  
から身ならば登り得むとぞ看護婦は慰め励ませりまこと得べきか  
重荷負ふて折立坂をひた攀ぢし激しき力われによりかへれ

舌の三分一切除されたため、発声思ふに任せず、  
毎日屋上にて発声訓練を兼ねて万葉集を

朗読す、この日もまた

十月三日

万葉歌力のかぎり誦みゆけどふしふし声はときれて続かず  
発音しえぬ音韻いくつ舌の根に手術受けたるわが口あはれ  
ときれつつわれは誦みゆく声かぎりわれは誦みゆく万葉の歌



記紀萬葉実朝麻須美潮とひびき甚えゆくわれを奮ひ起たしむ

読書

みつみつしくうねりうちくるリズムにのりあかす誦みゆく「消なほ消ぬかに」  
若き日の悲しみ喜ひひるときに噴き溢れおつ「祖國禮拜」  
張り満てるいのちの力われに迫り奮ひ起たしむ「病牀六尺」  
病み床にみなぎるいのちみつみつしくわれを息づかしむ「仰臥漫録」  
うねり打つ海の高浪磯の匂ひ心とよめかす麻須美の歌は  
聖徳太子親鸞宣長日本の思想は息づくわが枕辺に  
柳田國男折口信夫枕べに積みあげてわが心ゆたけし  
學ぶべきこと多にあり心しつめ事計りせむ病に負けし

関正臣氏へ返し

十月八日

おごそかに君仕へますみやしるも秋のしぐれにぬれつつあらむ  
すみやかにませと祈るわれもまた力の限りよみがへりたむ

橋本芳雄氏、氷見よりはるはる見舞に見ゆ

越の国の果の田舎あなゆ我われを思ふはるはる見舞に來給ひし君  
久の逢あひはうれしくもあるか回らぬ舌むりに動かしぬ話はずみぬ

松吉基順、長内俊平氏らあひついで見ゆ

たづね來ますはいしめこの人おのづから心通ひて流ぐましも  
名のみ知りしその人といま会ふを得てただにうれしも病み床にして

室田正久氏より便あり

見舞ひせず帰りし許せと車中より葉書賜ひつ走り書の文字  
くりかへし便り賜へばその人やここにある如し相見る如し

関正臣、夜久正雄、小田村寅二郎の諸氏、  
多田光氏夫妻、次々に見ゆ、四十年来  
旧知の先輩なり、

つきつきにへら来ませりわかいのち生きていゝ会ひ得し幾久にして  
よとせ  
四十年はただ夢の如し夢にあらす嬉しくもあるか相見るうつは  
退院ののちの生き方こまごまと君示しますすわれ生きむとす

賜りし古事記のカセット目つぷりてイヤホンにて聴く痛み人われは

かつさあは

(信時潔作曲の古事記なり)

上総安房渚に近き丘添ひの秋を思はしむほととぎすの花  
賜りしほととぎすの花しとろにも傾きすかれ秋深みゆく

日本図書館協会、全国<sup>(会)</sup>図書館協議会の人々次々に見ゆ。  
国許からも図書館の人々より電話・書状相次ぐ。

図書館の人々おし寄せ潮<sup>うしほ</sup>の如職場感覚をわれに目ざめしむ  
われやかて館に戻らむ仕事せむ今しはらくを守りませ君  
くさぐさの郷土の誌料書庫の隅に我<sup>あ</sup>を待つらむと郷土誌料は

京都の山下勘一氏、久美子氏見ゆ

癒えて京都に遊ぶに来ませと手握りて勵まし給ふぞうれしかりける  
妻つれて旅にいでむとはろはろに心動くをたのしかりける  
紅の森瀬見のせうらぎ夢の如おもかけにたち清し京都は  
旅ゆかばたのしかるべしわがからた旅には耐へじだと思ふのみ

妻の母みり、その話を聴き郷土の宗教的風土を思ふ

病室を道場とかも念仏の道ねんごろに君説きたまふ  
南無阿弥陀仏唱へ息つき雪国のきびしきに幾世耐へし人びと  
土の如草の如根強くかすかにも生きし民の尽きぬいぶきかも  
病いやす祈禱に非ず報恩のまごころの限りと唱へたまひぬ

弟夫妻、妹夫妻、義兄妹、錦姪らつぎつぎに見ゆ

妹姪<sup>いもめ</sup> 歸りしあとに弟<sup>おとう</sup>来ていたはり励ます心うれしも

萬葉歌<sup>か</sup> 声あげ歌ひかくまひに回復せしと共に喜ぶ

弟<sup>おとう</sup> が残してゆきし仔犬の詩たどり読みつつ涙垂り来も

幼き日野山に遊びし思ひ出は夢かと思ふ又も語らな

ふるさとの越<sup>こし</sup>の立山<sup>たち</sup> 雪すむに白く置きけむ行きて早見む

共に見む

# 「付載 弟の詩」

## 仔犬のうた

幼い頃のやさしさに  
もう一度帰ろうか—  
幼い頃のやさしさは  
仔犬の尾っぽのよう  
ありました  
幼い頃のやさしさは  
まこと、やはらでありました  
仔犬の鼻や、足の裏

## 廣瀬智光

幼い頃のやさしさは  
仔犬の胴のぬくとさよ  
そこはかともない  
乳の香りがありました  
うまし仔犬の昼寝かな—  
夢物語などないけれど  
色のキラキラ万華鏡

秋の陽は照る、茱萸の実に、  
風はやさしく華に吹く  
陽はふる 橋に、磧に、河に、  
遠いほろかな万華鏡  
あゝ幼い頃のやさしさに  
もう一度帰ろうかー  
帰ろうか

反歌 (歌作)  
われも弟も  
仔犬となりて 野路山路  
さまよへるといふかたしその夢



癌病養中詠草

その五



十月十四日 退院 ひとまつ沼袋の蜷川邸に落着く

十月十六日

かく生きて御製拝誦する幸<sup>さいち</sup>を思へばわれは泣かむとも思ふ  
虫の音も絶えてつめたき朝庭に鋭き鳥の叫びか南<sup>みな</sup>より

その夜

疲める身を湯に浸しつつ目つふればかすか南<sup>みな</sup>よりるこほろぎの声  
つくつくと湯に浸りつつかすかなるこほろぎの声に心とめつも

空の初旅

十月十八日

(退院帰郷の折はいめて飛行機を利用す)

緊張と期待に満ちてタラップを今踏みのぼる空の初旅  
機は今し浮上す眼下にひらけゆく市街、川、道、田園のみどり  
雲の海眼下にひろがりいや果に清し力強し雪白き富士  
富士見ゆと妻に示せば妻も身を乗りいだしつつ歓声をあぐ  
富士の峰遠のくなべに上越の嶺山群山雲の下に見ゆ  
雲のまに見え隠れする秋山のひだに浮々と陰影のあり  
地形図を見あらず如し山の向をうねりきらめく谷川も見ゆ  
大きな川横たはる見ゆ新潟の今上空とアナウンスの声  
機は今し海上に出づ青海の皺かと思はるは波のうねりかも  
日本海真青にひろがりゆるやかに水尾引きて行く船いくつ見ゆ

海に迫り黒き陰おとす山が見ゆ天險あやしうす親子おやこ知かまな下にちいさし  
横に走る頸城くみぎつら山、真向まへむかひは大蓮華おほんげ立山たてやま、檜穂高遠し  
きらめくや雪のつらなり鹿島かも五竜かも大蓮華かも光るその山  
ふるさとの劔立山たてやま燦然と眼下なためにまぶしききらめき  
黒部川、片貝、早月、いく川をたちまち過ぎてひろがる平原  
常教寺川、次神通りと思ふまにわが機ゆるやかに旋回に移る  
飛行機は高度を下げつ神通り、富山市街とあわだしく見つ  
わが所の大き建物の一つ目を走り過ぎ飛行場の上  
なめらかにわが機は今し着陸す向きをかへつつ靜々しづかと着陸す  
タラップを今踏みくだるつつがなくなる里の土今踏みおとす  
飛行場横切り歩む出迎への人々の中に裕一も居らむ

歸郷

十月十八日

生きてわれふるさこの土うつつにも踏みつつ涙とどめかぬつも  
生きてわれふるさこの土踏むべしと思ひかけきや草簪き地を  
ふるさとの我<sup>わが</sup>家の草むら秋深くかすか南にゆるこほろぎの青  
わか家の神棚<sup>いひ</sup>魂棚<sup>たま</sup>手合せて坪み伏しつゝ涙あつしも  
いのちありてわれは帰りぬこの足もてわか家の疊うつつに踏みぬ  
苔庭は草茂くして荒れたれどわれいのちありこうつつに眺む  
ふるさとの劔立山<sup>たち</sup>あざやかにまさ目にぞ見る生きて帰りし

産土<sup>うぶすな</sup>白山神社に詣つ

十月二十八日

生きて帰りし喜び申すとなつかしきわが氏神にまうてまつるも  
秋日びより和さわやかにしてこま狢犬も鳥居も暖かになつかしく見ゆ  
みやしろの石のきだはしの日溜りにここたうぐめく秋蜂の子ら  
羽根よわき秋蜂の子ら群がりてこの日たまりに何を語るぞ  
不自由のからだに屈せたまひ魂は強く生きむと誓ひて拜む

強くわれ生きむ見をなはしたまへ

われ自己一身上の幸福・病氣治癒等を神仏に祈願せず  
依頼せず。平常は無心に参拝し、ただ参拝をまよひとする也。  
事あるときは、これを報告し、わが心情を披瀝し、神の照覽  
を祈念す。加護・除災を依頼するにあらず。「目め護りませ」  
「見みえなはせ」とたゞ「照覽を仰ぐ」のみ也。

十月末より十一月にかけて図書館係者史  
学園係者、親戚知人、男ともな女な次々に訪ねて見ゆ。  
うれしくなつかし、されど休むまもなし。

かく生きて相見るよろこびに涙ぐみ手を握りしむ幼な馴染は  
久にして生きて相見る君も君もこころひしくしてはすむが如し  
疲れけむ休めと言ひつつなほ語る君がよろこびは潮うしほの如し  
相次ぎて友らと笑ひ語りへばわれくたひれぬ病後の身あはれ  
見舞客潮しほと引きたる心接面しめんにわれは動かず泥の如くに

泥蟹どいの如物言はずあり

○

散歩すとわがいでしに逢はずして君帰りしか逢ひたかりしを

十一月二日



高瀬重雄氏より来翰「十月廿九日皇居に参上、  
陛下賜謁ののち賢所の皇霊殿に参り申し候、折  
しもかなり強き雨になりしも、小生は傘をやめて雨前  
に立ち二拝三拍手一拝一うの礼をなさげ、心中ひそかに  
大兄の御病氣平癒をお祈り申し上候、云々」とあり、  
深く感動す、

十一月二日

賤<sup>しか</sup>われの近づき<sup>か</sup>たき賢所<sup>かしこ</sup>しぐれにぬれつつ拝みけむ君  
大前の松もしみみに時雨<sup>しぐれ</sup>降りぬれそぼちつつ祈りけむ君  
礼服の肩もしとどに雨落ちて君ぬれけむか松の傘下に

言語障害、食事障害、加ふるに右腕不自由、  
回復すべくもあらず  
十一月三日

柁の花咲きいひてわかからだ不自由なるままに秋暮れむとす

亡き母を憶ふ

十一月五日母の命日

死出の海にいま舟出すとたまきはるほのかに言ひて逝にし母はも

かぎりぬのかすかに言ひて逝きし母はも

みなと風いたも寒しとつづやきし母のいまはのうは言あはれ

死出の旅かなしくありけむ揺れうねり海ゆく小舟や寒くしありけむ  
われもまた病に沈みたらちねの死に至る悲しみたどり知りつも  
われをばもかなしいたましと隠り世にひた歎きまよむたらちねあはれ

隠り世はただこゝもとぞ目つふれば母の御姿ありありと見ゆ  
身をささげ心くだきて我に尽す妻こゝにあり御心安かれ

散歩にいでて 十一月十二日

四つ屋川川草<sup>さ</sup>深しみに揺れなひき人麻呂の歌沁みて思ほゆ  
あつい田の細き畦道<sup>あぢみち</sup> 枯草の中にかそけきこほろぎの声  
荒れはてて枯草折れ伏す所畠<sup>はた</sup>に葱の四五本をほ青く見ゆ  
春日の光浴びつつ行く町の垣の隈<sup>くま</sup>みに大吠ゆる声

## 明治神宮参拝

十一月二十一日上京、癌研検診・順調と診断さ  
る。この日明治神宮参拝。退院後はじめての  
参拝なり。

まうでまつる、代々木の太宮さわさわに木の葉吹き落す風の清しも  
いのち生きてかくまうでゆく喜びのリズムを奏ついさご踏む音  
櫓の香清きまへに妻と並び柏手拍つも今のうつつに  
わが病癒えゆくよろこび目つぷりて生けまつりつつ涙ぐましも  
妻も手を拍ち合せつつ何事か祈ひ憐む如しつふやぐか如し

十一月二十三日 ふるさとにて

散り敷ける<sup>ひらき</sup>松の花うちくたししぐる夕となりけるかも  
松のかそげき山花散り敷きてひそげき庭に鳥の影すも

十一月二十三日夜 新嘗祭の夜なり

夜をこめて神祭ります大君を偲ひまつるもしぐれゆく夜を  
夜深くしぐる音を目ざめるこのちのかきり<sup>あひだ</sup>に<sup>た</sup>聞くかも  
小夜<sup>こよ</sup>しぐれひたゆく音にまじりつつ向遠にひびく雨垂りの音  
しぐれ止み雨垂りの音向遠に<sup>い</sup>何とも打つひびきのかなしき

尾田博清氏へ

日の本のいのちあなづる今うの世を夏夢の憤りいねかてぬかも  
夜深く目ざめてきけばしぐれゆく音にい及きて雨散た走る

尾田氏シヘリア抑留中詠草「北天抄」を出版さる。  
味噌樽のタカを外してペンとし、灯火の油煙をインクとし、  
煙草の巻紙の小片に細々と書きこみ、衣服に縫ひこみ、  
ひそかに持ち帰られし詠草なり。われその序文を寄  
す。病のため出版祝賀会には出席しえず。(序文を  
草せしは七月、癌研入院の半月ほど前なりき)。

十一月、岡野弘彦氏より近著「花幾年」を贈らる。  
その中の立山の条に「翌日は猛烈な風雨。その雨の中を、  
案内してくれる国学院で同級であった廣瀬誠君は、大伴  
池主の「立山の賦」に和する長歌を朗々と暗誦しながら歩  
く。雨はたちまち肌まで濡れとおつて、身はふるえ上がるよ  
うに寒いが、廣瀬君の情熱の声は火のように燃えつづけて  
止まない。……」とあり。昭和五十一年夏の往時を回想し、感  
にたへず。

池主<sup>いけぬし</sup>の立山<sup>たち</sup>の賦<sup>うた</sup>吹きし<sup>い</sup>ぶく雨に負けしと誦<sup>よみ</sup>み行きしかも  
わが誦<sup>よみ</sup>みし声<sup>こゑ</sup> 頌<sup>うた</sup>してかへりくる思<sup>おも</sup>ひかなしき君<sup>きみ</sup>が文<sup>ふみ</sup>かかも  
声<sup>こゑ</sup>かぎり萬葉の歌<sup>うた</sup>うたひあけし舌<sup>しほ</sup>なかなば無しあはれわが口

同じき年の二月十四日 皇太子殿下に立山の歴史を説明  
申上げ萬葉の長歌を誦せしことも思ひ出づ

日の御子のみまへに侍り萬葉の長歌朗々と聞え上げにき

日の御子も妃もほほゑみ浮かべたまひわが朗誦を聞きたまひにき

たととしき舌動かして今誦めは延垂りくるわが口あはれ

萬葉に立山に魂打ちこみて生き賀きしわれに悔なし

「海ゆかば」立山の魂は脈打つよろづよまてに



出雲国風土記国引きの詞章を読む

— 青砥宏一氏より「朗々と出雲の国の国引のふるごと  
誦せし君の声はも」と寄せられし、かへし—

十一月二十六日

八雲立つ出雲国引、寄せかへおりず海鳴りのとく如し  
底にも神のもろ声 国来国来とひびきて止まずうやりを打ちて  
荒れさわぎ風ぎゆく海のなごり波ただに思ほゆ国引きの詞章  
おそましき病に伏してわれはあれど古ごと誦めば力わきくも  
わか口はいまは拙し 誦みあぐる声も続かず古ごとあはれ  
君の前にこの古ごとを朗々と誦みあげしその日遙けく思ほゆ  
拙くとも拙きまに誦みあぐるわが声届け君があたり

青砥氏へ

十一月二十九日

越路には雪ぞちうつく出雲路の木立もすてに冬枯れにけむ  
出雲路の湯のわきいづる屋があたり立つ湯煙に雪かも降らむ

### 同室患者者の訃報

その知らせ聞きて驚くただ悲し隣のベッドの人すてになし  
いま一花咲かせむといひて意氣ごみし君はむなしくなりにけるかも

十一月三十日 富山県図書館協会五十周年記念式典  
われ副会長として病後の身をおして出席。永年勤続の  
表彰を受く。

わがからだに疲れてつらし名を呼ばれよろめきて起つこのからだあはれ式典は長々とつづく筈<sup>な</sup>え疲れ晴のからだの置き所なし

祝宴。大田、木下、吉本ら歴代館長はいめ多くの旧知に会ひ歡談す。吉本氏失明に近き身をもつて今春遙々見舞に来られしが、われ松院後にして会ひ得ざりき。この日相擁して感謝す。われ手術のための機能障害にて食物多くは喉を通らず。食へば噎せ易く、また会話時は延の処置に窮す。酒は厳禁にて一滴も飲まず。

会ひ得たるこの喜びに相抱<sup>いだ</sup>き延もしとどに笑み語りつつ幾<sup>いくら</sup>久<sup>く</sup>のうれしき宴<sup>いんぎん</sup>栓<sup>せん</sup>めきてわがつぐビールを君受けたまへ

食べ物に噎せかへりつつ持ち直す暑もしどろにうれし泣きすも

こころにして思はかなし今はなき初代館長面影に見ゆ(この年九月逝去)

中島会長面影に見ゆ(五十五年逝去)

中川・江尻・上・若三婦人に送られて帰途につく

並みゆくは幾久なるぞ式典の疲れも忘る夜風さややかに  
語りつつ笑まひつつゆく並木道額にあたる夜風すずしも

裾さばく衣すれの音かぐはしき人にたぐひゆくこのゆふへかも  
きみにそみゆく

翌日疲れ甚だしく抱つこと能はざりき。

上京車中詠（癌研検診のため） 十二月二十二日

汁なこは物食らひえず茶をそそぎかつがつ吞込わが車中食  
前うしろ酒のお人のささめきを聞きつつすする澁茶うすしも  
いつもいつも上京車中わが飲みしビールも今は禁断のもの  
この野菜喉通らじとわが妻は刻みに刻みわれに食はしむ  
車中にもナイフとまな板持ち込みて物刻む妻を人いかに見え  
甘酸ゆき香をとばしつつ蜜柑の実ほぐしゆくかも汁もしとどに  
食ひ難きわれを憐れみ蜜柑の実妻はほぐしてわれに食はしむ  
妙高山さん雲貫けり物食ふ手とめてぞわが見る雲な隠しそ

妙高山雲を負けり車窓よりめでゆくわかれを雲に隠しそ  
新婚の思出今ははるけくて妙高山を黙して見てゆく

(二十九年前、妻とともにこの山麓に旅行せしなり)

歸郷信越線車中詠(検診の帰途) 十二月二十四日

赤城山遠ざかるまゝに榛名山ま向ひに近く夕日浴びたり  
妙義山のけはだつ峰々夕空をかきりと黒し冬の妙義は  
夕日おちて赤き西空黒々と荒船山の傾ける見ゆ  
浅間山の噴きあぐる煙いたたきに這ひまつはりて日は暮れ  
ゆくも

雪の刷毛目<sup>はけめ</sup>裾引き峙つ浅面山夕つく空に暗みゆくかも

夕空に暮れゆく浅面噴きあぐる煙はなほし赤々と見ゆ  
信濃路の山くろくろと暮れしづみ星一つ低しその山空に  
一番星列車の意を走りゆきしりへに過ぎつあはれその星

昭和五十七年々賀状にしるす

壬戌年頭述懐

仔犬のこと素直に柔かにいきいきと生きむと思ふ初思ひもせず

十一月下旬より勤務に復す。たちまち人事、  
たちまち予算と事繁くして、あるいは忙し、ある  
いは激<sup>ガキ</sup>し、休養のいとまもあらず。

仔犬のごとあらなと願へど仔犬のごとわれはありえず繁<sup>イ</sup>しこの世は

正月廿八日 古事記撰録記念日

冬の夜を夜深く寝ざめふることの尽きざる調べひたに思ひぬ







## あとがき

この一巻は私の癌病養中の詠草である。昨昭和五十六年二月末診察を受け、三月初め癌の宣告を受け、富山、つづいて千葉の病院で入院加療、後再発して東京の癌研病院で手術を受け、生死の境をさ迷ひ、十月中旬退院帰郷、十一月末曲りなりにも勤務に復し、その後、年末年始に至るまでの詠草（詩一篇、短歌百四十連五百三十余首、俳句若干）である。

初診の折の医師の態度から、私は重大な病であることを感知し、覚悟してゐたが、一週間後病院から呼出しがあつた。医師は看護婦に命じて外来患者を外へ出させ、私と私の妻の二人だけにして、私の前で深々と呼吸された。私はすべてを察知し「先生、癌ですね」といふと、医師はしばらく私の顔を見つめ、静かに肯定された。そして「発病後、半年程経過してゐます」と言ひ添へられた。傍に居た妻の目には涙が溜つてゐた。

入院・治療について医師の指示を受け、種々打合せをすませると、私は妻の運転する車で勤め先の図書館にかけ戻つた。妻の動作は悲しみにたへて沈着であつた。私は課長を集めて非常事態を告げ、後事を託し、つづいて全職員を集めて別れを告げた。ついで県庁へ飛び、

教育長・社教課長にも事を報告した。教育長は沈痛な面持ちで私を励まされた。自然保護課では、この日の朝承諾したばかりの自然解説員養成講座の講師を辞退した。課長が驚いて病名を聞くので「癌です」と笑って答へると、「御冗談でせう、からかはないで下さい」と笑ひ、本当にしてもらへなかつた。その他数カ所の講演の約束はあわただしく電話で取消した。

とにかく癌といふことで、万一の覚悟もしてゐたが、約一カ月の照射治療で、不思議なほど早く、九分通り癒えた。つづいて千葉の病院では、最後の仕上げといふ気持で、比較的小な気分で療養し、やがて完治といはれ、全快の喜びに浸つた。

二ヵ月半後の再発の打撃は大きかつた。癌研で大手術を受け、生死の境に出没し、妻も死物狂ひで看病してくれた。まさに妻に手を引かれ『古事記』の言葉をかりれば生大刀・生弓矢を帯び、沼琴を抱へ、黄泉つ比良坂の藪茨の中を、満身傷だらけになつて、辛うじて現世に生還した思ひである。この間、家族兄弟姉妹戚師友先輩上司同僚後輩知人ありとあらゆる人が、あらん限りの方法で私を励まし慰め力づけて下さつた。まことに皆様のお蔭であつた。

病中、夜久さん宝辺さんなどへ宛てた便りのはしに書きつけた私の詠草（詩「宣告」）をは

じめ短歌十二連四十二首）が『国民同胞』二四四号（昭和五十七年二月号）に載せられ、幾人もの方から懇切な御言葉をいただき感激したが、この他にも、日記・手紙の書き潰し・種々雑多なメモ用紙に書き散らしたものが多数あつた。それをある程度整理して、夜久さんにお目にかけたところ、夜久さんはこれを小田村さんに示され、ぜひ印刷したいといふお二人の話になり、国民文化研究会の諸氏もこぞつて賛成して下さい。小田村・夜久両氏はじめ諸氏の御好意御熱意ただ辱かたじけなく、感謝の言葉も知らぬ思ひである。

そこで、さらに脱けてゐたものを探して補ひ、全般にわたつて、あるいは削り、あるいは手を加へ、詞書・左注ことばがき さちゆうを添へ、作りさしのもの半成りのものは煉りあげて仕上げた。

詠草を整理するに当つて、振仮名には意を用ひた。立山は古代には「たちやま」、中世以降「たてやま」であるが、詩語・雅語としては今も「たちやま」が通用してゐる。私は一首一首の声調を重んじ、その場その場に應じて、あるいは「たちやま」、あるいは「たてやま」を用ひた。幾久（いくひさ・いくひささ）、道（みち・ぢ）、潮（しほ・うしほ）、魂（たま・たましひ）、額（ぬか・ひたひ）、我（あ・わ・われ・あれ）、我家（わが いへ・わがや）、弟（おと・おとと・おとうと）等々、音訓にわたるものでは、天地（あめつち・てんち）、医師（くすし・いし）、眼下（まなした・がんか）等々、いずれも一首の音調によつてまた多少意

味あひも考慮して使ひ分け、それを振仮名によって示した。

歌詞に一案と二案とあつて、どちらも捨て難く思つた場合は、別案を傍書として書き添へた。『萬葉集』にも「死なば死ぬとも一云、後は死ぬとも」「あが別れなむ一云、あひ別れなむ」など、別案又は別伝を添書分注した例がしばしばある。別案として味はつてもよく、「死なば死ぬとも後は死ぬとも」「あが別れなむあひ別れなむ」と仏足石体歌（五七五七七）風につづけて読んでもよい。そのやうな例を念頭に置きつつ、私も別案を添記しておいたのである。

私が黄泉つ平坂をさ迷ひつつ下る間、携へてゐた沼琴は、草にふれ樹にふれて音を發した。それが私の詩歌詠作であつた。わが思ひを歌に吹きこみ、くぐもれる心を歌ひ晴らし、それによつて大きな力を得て、私は歩みつづけた。祖先みおやたちが思ひを託したと同じ詩型で、私も詠み、私も歌ひ、わが思ひが縦には祖先みおやたちの世界にとけてゆく、横には同胞はらちと一つの信海にとけてゆく、わがささやかないのちが、日の本の大きないのちにとけてゆく「しきしまのまち」の喜びを、そこに味はひつつ苦しい坂道を歩きつづけたのであつた。

大患豫後、私の健康はまだおぼつかない。手術のための言語障害・食事障害は強く残り、語れば口に唾満つばきち涎垂よだれれ、発音は所々不明確である。固いもの大きなものは食ひ得ず、細かく刻まねばならない。右腕の動作も不自由である。従つて検診のため上京する折など今も

つて妻の介添へが必要である。「羽根折れてつちにおつとも生けるまは光れはたるこ天あめのまにまに」これは私の愛誦し、心の支へとして来た川出麻須美先生かはでますみの歌であるが、この歌の如く、まさに私は羽根折れて地に落ちた螢ほたるである。しかし、羽根折れて地に落つとも、生ける間は全力を尽さねばならない。天地あめつちのまにまに生くるつとめを尽さねばならない。この百数十連五百三十余首は私の拙い力のあらん限りをこめての詠作である。たどたどしいながら私の呼吸である、脈搏である。私はなほ、生死のはざまの黄泉よもつつ平坂ひらさかのすぐ近くを歩みつづけてゆく。そして悲しみも喜びも、古典に託して誦みあげ、またみづからの拙き言葉にこめ全力をそそいで歌ひあげてゆく。歌は私の魂のひびきである。歌を詠み歌を作ることにはわがいのちのあかしである。

昭和五十七年五月三十日

廣瀬 誠





## 詠者略歴

- 一、大正十一年一月十八日富山市にて出生
- 二、昭和二十三年国学院大学予科中退
- 三、前富山県立図書館長、現同嘱託
- 四、主要著書  
『立山黒部文献目録』 富山県立図書館刊  
『越中奥山の地名』 富山県国語学会刊  
『立山信仰』 富山県教育委員会刊  
『立山と白山——その歴史・伝説・文学——』 北国出版社刊  
ほかに、「校注解題書」「共著・共同執筆」「編纂書」等多数
- 五、現住所 〒930 富山市星井町三―二―十三

## 『坂の沼琴』

昭和五十七年八月一日（初版）  
昭和五十七年十一月一日（再版・訂正版）  
（非売品）

詠者 廣 ひろ 瀬 せ 誠 まこと

編者 小田村寅二郎

発行人 社団法人 国民文化研究会

104 東京都中央区銀座七―一〇―一八（柳瀬ビル）

電話 〇三（五七二）一五二六〇七

振替 東京（七）六〇五〇七番

印刷所 奥村印刷株式会社

東京都千代田区西神田一―一―四

















# 坂の沼琴

— 癌病養中詠草 —

廣瀬 誠





